

日本古代史の成り立ちと

日本書紀

―創られた伝統「聖徳太子」を中心として―

日本史専修 新川 登亀男

日本古代史への理解とその創出が、いかに日本近代の成り立ちと緊密な関係のもとでなされてきたのかを知ることの意味は大きい。本報告は、そのために「聖徳太子」認識の問題を取り上げ、具体的には①教科書の記述、②伝記を中心とした「聖徳太子」の論説、③法隆寺のありかた、という三つの観点から、その相互の諸関係を展望する。そして、現在の日本史（とくに古代史）への理解のありかたを自己検証し、これからの実践を模索していくことにつなげたい。

明治の日本が受け継いだ「聖徳太子」は、かつて十世紀末に確立したとみられる

『聖徳太子伝暦』の記述に多くを負っている。なかでも、林羅山・荻生徂徠以下、平田篤胤らに及ぶ儒学者や国学者は、「伝暦」にみえる「聖徳太子」の言動をもって大義名分にそむき、崇仏へといたずらに傾斜した「非人」「愚成人」「御不埒」なる人と断じて止まなかった。法隆寺もこのような糾弾の最中であって、その存立自体が危まれた。しかし一方、河内国の太子廟での会式では「太子の一夜ぼぼ」といわれる男女の交通の格別な習俗慣習もみられ、なお「聖徳太子」認識は多様な側面ももっていた。にもかかわらず、このような習俗慣習がやはり「伝暦」読後の展開であることにはかわりあるまい。

明治以降の「聖徳太子」は、このようなそれ以前の「聖徳太子」と格闘しながら、それを葬り去ることにつとめ、さらにあらたな伝統として創出されていったものである。とりわけ、勅撰史書であることが強調されはじめた『日本書紀』は、旧来の「伝暦」にかわって、この伝統づくりにも多大な

貢献をした。「聖徳太子」は、天皇（女帝）の代行者として、また早世ゆえに即位できなかった「摂政」として、推古朝の政治文化政策をすべて立案し、かつ指導遂行した「偉人」とみなされるようになる。それは、『日本書紀』の有力な読み方としても定着化していき、小学校教科書や蘭田宗恵・久米邦武・境野哲らの「聖徳太子」伝記の言説とも矛盾することなく、むしろ緊密な相互関係が認められる。

ここに立ち上げられてきた「聖徳太子」は、一部の仏教者の盲信や民間習俗、あるいは儒学・国学者流の排斥によってこれまでながく妨げられてきた本当の「聖徳太子」の復権として、またその歴史的事実の回復として認定されることを求めた。それは、同時につくられはじめた「日本国民」が与すべき研究問題としてもうたわれたのである。この過程は、五か条の誓文、帝国憲法発布、そして広く政治外交から文明受容に及ぶ明治維新以後の近代そのものの成り立ちの一環としてとらえることができる。

き、明治天皇の死は、この相関性を確証させることに大きく寄与した。すなわち、「聖徳太子」は明治天皇の生死のさまと折り重ねられ、封建制度ゆえの党派争闘・保守主義を打破すべく、大化改新に向かって「日本第一の維新」を試みた文字通り「聖徳」なる天皇家の一員として、文武にわたるその名を刻まれるようになっていった。

この間、大政奉還にならって聖霊（「聖徳太子」）奉還を敢行した法隆寺は、勤皇の志を鮮明化していく。それは、祈祷・供養の寺堂から、世界的に古くて稀有な幾多の宝物を伝来し、かつ展覧する日本ないし世界最古の木造建築（七堂伽藍）への変容化の道程でもあった。岡倉天心・フェノロサ・ビゲローらの美術調査・援助はこれを加速し、法隆寺再建非再建論争も生まれた。教科書では、難波の四天王寺にかわって法隆寺の記述や図絵が増大し、夢殿を含む伽藍や、唐本御影（献納宝物）にもとづく「聖徳太子」の形象が子供たちの脳裏に焼き付けられていった。こうして、「聖徳

太子」の維新と明治天皇の維新とを結ぶ数々の表象が法隆寺から生み出されたが、眼前にひろがる法隆寺伽藍は、まさにその歴史を証す動かしがたい事実としてそびえ立つことになり、この伽藍は非再建でなければならなかった。

一九二一年（大正一〇）の「聖徳太子」一三〇〇年忌事業は、五〇年以上にわたって育て上げられた「聖徳太子」の完成を誇らしくうたった。なぜか裕仁皇太子の「摂政」就任と時を同じくするが、全国津々浦々で太子堂建立も含む法会が催され、聖徳太子奉賛会が組織された。法隆寺の宝物は『法隆寺大鏡』によってはじめて披露されるようになり、三経義疏は『世界聖典全集』に収められて日本唯一の聖典としてあげられ、文字通り聖人の地位を「聖徳太子」は確保したが、その世界文明的な環境は有賀長雄訳出のフェノロサ『東洋美術史綱』によって説明されることになる。紙幣肖像の実現も、これら一連の事業にかかわるものであり、唐本御影にもとづき、か

つ黒板勝美の進言をうけて「摂政」にふさわしく、明治天皇像に似せて練り上げられたのであった。

一三〇〇年忌事業の一環として、黒板勝美の『聖徳太子御伝』が全国の学校・図書館等に配布され、「国民」のテキストとなった。そもそも黒板は、一九二〇年前後の日本が思想界の混乱によって、「国体の危機」を招いていると認識し、その「国体の尊厳」を取り戻して「大日本帝国」の建築に向かわなければならぬと考えていた。その建築とは、「国民思想を改造」し、「国民的自覚」のもとで「新しい文化を建設」するというものであった。ここに、「聖徳太子」の摂政政治がよく「国体の危機」を救い、「国体の本義に徹底」したものととして高らかに顕彰され、「日東帝国」の建設をめざした「国体の権化」たる「聖徳太子」が喧伝されていくことになる。あわせて、その「国体の尊厳」の記念物は法隆寺伽藍と宝物にほかならなかった。

ここで奉賛された「聖徳太子」は、いわ

ゆる戦前にのみ通用するような例外的で孤立したものではなかった。明治の日本が受け継いだ「聖徳太子」は、ここに至って完全に葬り去られたが、これに入れかわった黒板流の「聖徳太子」は、その後も、いわゆる戦後の新憲法にもとづく平和文化国家の日本立て直しに引き続き動員され、いわば戦前・敗戦の危機からの救済に資するものとして、衣をかえながらもその骨格を少なからず留めたのである。坂本太郎は、その継続的価値を苦渋に満ちた形で表明したことがあるが、その後、一九八四年（昭和五九）に紙幣肖像から「聖徳太子」は完全に消え去り、年忌行事からむ論説のまともった開陳もみられなくなって、「聖徳太子」の解体と空洞化が進んだかのようにあった。

しかし、その「聖徳太子」が容易に解体するものでないことは、二〇〇一年（平成一三）の一三八〇年忌をめぐる様々な企画（美術展・テレビドラマなど）によっても明らかである。それにもまして、近年の

「聖徳太子」存否騒動は、明治以後に創り出され完成した「聖徳太子」の堅固さを様々な局面から逆に照射する結果になっている。黒板勝美の言説に頂点をきわめた「聖徳太子」とその成り立ちは、なお創られた伝統としての常識の範囲にあるのであり、そのことを端的に、しかもっとも淡泊に物語るのはいはり教科書である。たとえば、政情の危機にあたって国政改革をすすめた「摂政」。旧豪族体制からあらたな朝廷の秩序をめざし、冠位十二階や憲法十七条などを制定する。「対等」な隋との外交をはじめた。大化改新へ大きな役割を果たした。世界最古の木造建築として飛鳥文化をかざる法隆寺伽藍の写真掲載など。

もとより、これら現今の教科書に黒板流の「国体」用語はみられない。幸か不幸か、文脈も見えにくい。しかし、「国体」用語の連鎖は、一面で着せかえ可能な衣のようなものでもあり、その中の骨肉の部位はけっして溶解してはいないと読み取れる。一部の教科書出現化にのみ目を奪われ

ることなく、大多数の教科書の言説を今あらためて読み込んでみる必要があるとともに、それを可能とする豊かで鋭い力量ないし歴史感覚を私たちは鍛錬していかなければならないと考える。

「聖徳太子」認識の問題は、まさにその好材料であり、同時に試金石でさえある。多様な知と感覚の分野が収斂する稀有なところであるだけに、これを通じて多角的で総合的な自己検証が可能となろう。そして少なくとも、「聖徳太子」とその古代史は、私たち自身の「日本国民」としての成り立ちを保留してしまったところからは何も説き明かされることがないということを、ついで、本当の「聖徳太子」を解明することを標榜しつつけてきた明治からいわゆる戦後に至る近代の事実・実体主義の不確実さと矛盾・危うさとが問いかけてくる歴史全体の課題とをあらためて承知させられるのである。